

救急隊の搬送時間短縮

北まる ネット 患者情報共有で実現

第二十五回道広域医療連携研究会（会長・高橋明札幌白石記念病院副院長）が札幌市で開かれ、地域住民の医療介護情報を共有するシステム「北まるネット」を運用する北見市の取り組みについて、北星脳神経・心血管内科病院の田頭剛弦医療情報管理室室長が講演。救急隊員との患者情報共有で救急搬送時間が短縮した成果を紹介した。

北まるネットは、医療・療福祉情報連絡協議会と介護のスムーズな情報（会長・古屋聖見北見医師会長）を中心に、二十四年度から運用スタートを指し、北見市医



道広域医療連携研究会で報告した田頭氏

している。

個々人の各種診療情報に加え、ADL、家庭環境、MSWやケアマネジャーによる介入状況などをデータベースに登録。会員の医療機関や介護事業所がインターネットを介して閲覧できる。

田頭室長は講演で、これまで蓄積された情報を二次利用し、北見地区消防組合の救急隊員への情報提供を二十六年夏から一部試行していると報告。自宅へ駆けつける救

急車内で、救急隊員がタブレットで対象者のかかりつけ医、既往歴、通院歴、内服薬、家族の連絡先などを事前チェックすることで、対象者が会話できる状況になくても、「適切な搬送につながる」と強調した。介護施設に

向かう場合は、かかりつけ医などの情報を介護スタッフに聞く手間が省けて好評という。およそ三十件の出動で搬送時間の平均は十分で、二分短縮との成果を示した。

一方、電子お薬手帳の実証実験結果も紹介。薬局の薬剤師が処方せんに印字されているバーコードをスキャナで読み取り、患者の処方状況を瞬

時にデータベース化。他の医療機関から処方された重複薬を確認できるとともに、調剤履歴や病名などを参照できる。「紙のお薬手帳を複数持っている患者であっても、このシステムを用いれば、「一元管理できる」とメリットを挙げ、参加薬局を増やすことが課題と述べた。

北海道医療新聞

平成27年3月27日